

〈水土の知〉の伝承 — 黒鋤の知、河童の知 —

広瀬 伸*

Shin HIROSE

1. はじめに 〈水土〉は「〈水〉と〈土〉と〈人〉の複合系」(学会ビジョン)である。「複合系」は文化人類学にいう complex、「系」は水系や生態系の系と同じく一連なりで切り離せないことを表す。「〈水土〉を扱う知」とはどんなものか。農業土木は「水と土に係わる学と技術」と称してきたが、上記〈水土〉の規定からすれば、〈水〉と〈土〉から〈人〉＝農家や住民が切り離せず当然対象となるし、施設の運営にもそして〈水〉と〈土〉にも生なまではなく人手が入っている。それら総体を相手にしていることを忘れないでおこう。

2. 黒鋤の知 黒鋤は開墾用の大型の鋤、もしくは土方・人足を意味する。モノとそれを使う人と同じ名前と呼んだ。江戸末期の大蔵永常『農具便利論』(1822)には「大黒鋤」と「小黒鋤」が紹介され、「尾張国知多郡から諸国へ土工として働きに出る者が使う」との説明がある。方言としての「クロクワ」は関東から四国にかけて広く分布する。

黒鋤は4つの異なる性格を持つ存在が同じ名称で呼ばれる。まず「道具」(農具)として。次に「タビ(の人)」としては、乏水性台地の知多半島から年間1千人を超す出稼ぎがあった。得意技はため池築造で培った床締めとセマチ直し(区画整理)。方言の分布は、関西のため池や塩田、そして近代以降も各地の道路工事などに出かけた各地での足跡だろう。「石の達人」としては、「クロクワさん」と呼ばれた巧者が、岐阜や三重の「百選」級の棚田に石垣を組んだ。「お役目」としては、古く

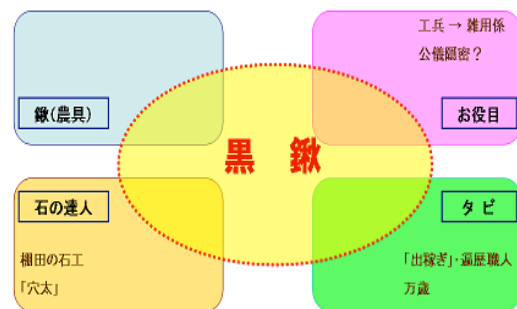
は工兵として軍道・砦などの造成や城攻めに携わった者たちが、幕臣として代を重ねるうちに門番や使い走り、行列の文箱持ち、堀の掃除などという雑用係になった。性格の違う存在が同じ名で呼ばれる現象は、黒鋤が複数の性格、知恵、能力を持っていることを示す。

「百姓」という存在も同様だ。江戸初期の『百姓伝記』(1680頃)は、現在は学や技術として独立する気象・作物・肥料等々と章立てし、これら農業に必要な知識や技を備えた者として「百姓」を想定する。すなわち、職業かばねを意味する「姓」を百種も持つ者、「マルチタレント」(「トータル・マン」と呼ぶ人もいる)である。〈水土〉を相手にするとは、各分野の知を兼ね備え「総合的に」扱うこと、さまざまな事物(要素)を関連づけて一つの全体(系)として見る知、つまり「百姓の知」といえる。

「百姓」という存在も同様だ。江戸初期の『百姓伝記』(1680頃)は、現在は学や技術として独立する気象・作物・肥料等々と章立てし、これら農業に必要な知識や技を備えた者として「百姓」を想定する。すなわち、職業かばねを意味する「姓」を百種も持つ者、「マルチタレント」(「トータル・マン」と呼ぶ人もいる)である。〈水土〉を相手にするとは、各分野の知を兼ね備え「総合的に」扱うこと、さまざまな事物(要素)を関連づけて一つの全体(系)として見る知、つまり「百姓の知」といえる。

伝統的な〈水土〉の扱い方は「土地相応」、その土地の性質に応じてということ。土地の持つ〈水〉や〈土〉や〈人〉の特性が制約条件となった時代から、科学技術の進歩で人工的な手段によって制約を克服していく。するとつい何の制約もないかのように考え振る

黒鋤の4つの性格



* 三井住友建設(株)

舞い、実際にはムリをして、災害など手痛いしっぺ返しを往々にして招く。

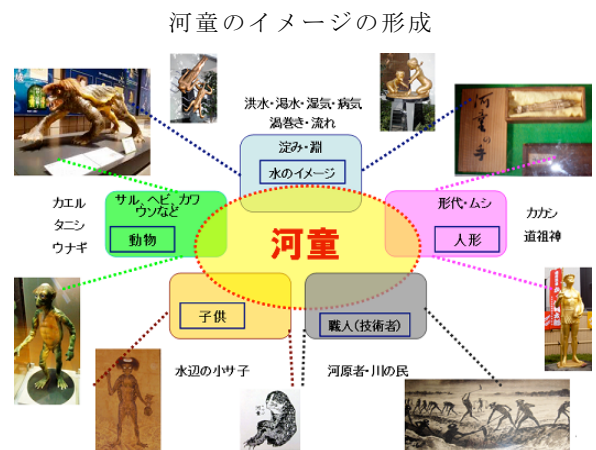
制約の厳しい江戸期、農書の主張は経験に基づいた「作りまわし・作りならし」だった。「回す」は、土地条件をそのままに最大限の収益を上げること。「均す」は、ムラの構成員がひとしなみに幸福であるように分け合い資源を融通しあうこと、つまり「セーフティ・ネットとしてのムラ」である。そういう知、知恵の働かせ方が農書のキーポイントだった。

再生産を持続させる土地利用構造は「マイナー・サブシステム」（おかず採りの楽しみ仕事）が媒介しており、他にも「見試し」など忘れられかけている知も豊富だった。

3. 河童の知 地域の人々が世界（自然）に対して抱く、感謝、供養、畏れ、境界（区別・差別）といったさまざまな想いとそれを託すモノに注目する。河童はそんな想いを託されたモノの一例だ。

河童も多様な性格を持つ。淀みや淵など「水のイメージ」、猿やへび、カワウソなど水辺の「動物」、子供として現れる水の神＝「水辺の小サ子」、左甚五郎伝説で木屑が化身した「人形」、東京・台東区の合羽橋の起源となった「技術者」など。

想いを託される無形のモノ、昔話や伝説は、経験の記憶・解釈装置として機能する。研究会では、河童のイメージと想いを紡ぐ“物語”について、青森の水虎様^{すいこ}を紹介し、関東の河童や奄美のケンムンと対比しながら検討してみたい。



青森・津軽の水虎様



4. まとめ 「化け物は進化する」。化け物は世の中を説明する巧妙な作業仮説だと寺田虎彦は言う。化け物の領域は科学の認識範囲外にあり、科学の進歩とともに不可視状態から見えて説明可能になる。だが、前代の化け物が可視となった外側には、再び化け物の領域が広がる。「化け物の進化」である。化け物の存在は、実在するかどうかは問題ではなく、人間にとっての「意味」ないしリアリティの問題だ。

結論として、化け物に象徴される「よいかげんな知」（「きちんとした知」+ α 、渡部信一による）の重要性を強調したい。知は多様である。ハンドブックのように体系化された「きちんとした知」がある。その底辺には、経験式のように「体系まで行かないがある程度整理された知」がある。最も基層には「未整理の知」が厚く横たわる。現場で働く知は、実践的だが多くは整理されていない。熟練・カンなど言葉やマニュアルの及ばない性質の知は、「きちんとした知」で扱いきれない暗黙知とされるが、これもいわば化け物の領域にある。さらには、狭義の「技術」のカテゴリーに入らない別の様態の知もあろう。〈水土の知〉はこれらの総体である。さまざまな事物（要素）を関連づけて一つの全体（系）として見る知、黒鉄も百姓も河童も、そのような豊かな領域に棲んでいる。